

募したくなる環境づくりも重要である。審査委員会等でも意見が出たが、読書感想文や書評など、より多くの学生が書きやすい部門の設立を考えて頂きたい。対象とする本を毎年数冊ずつ予め指定すれば、学生にお勧めの本を読んでもらえるし、審査も楽である。受賞作の著作権は図書館に属するのだから、何年か後に受賞作品集を出版してはどうだろうか。どのような作品が受賞したのかという情報は応募する際の参考になるし、「自分の作品が出版物になるかも知れない」ことが応募のモチベーションになるだろう。21世紀教育等に文芸作品執筆のための構想等の仕方を学ぶ講義を設置するのも良いかも知れない。日程も再考し

て頂きたい。審査期間が新学期開始や科研費申請の書類作成の時期に重なり、本学教員の審査委員には大変な負担である。「活字・文化の日」にこだわるなら、むしろこの日を応募締切としてはどうだろうか？応募者は夏休みが終わって最後の一踏ん張りができるし、審査期間も応募数に応じて変更できるだろう。また、現状では選に漏れた作品はどこを改善すれば良いのかフィードバックがない。「言語力」向上を望むならそのフォローも考えて頂きたい。以上思いつくままに書いた。ここで書いたことがどの程度取り入れられるか分からないが、来年度の応募者大幅増をお祈りする。

(ねもと なおき)

## 特集 新たに指定された貴重資料の解説

### 「弘前八幡宮古文書」について

附属図書館長 長谷川 成一



本学附属図書館には、「弘前八幡宮古文書」(以下、八幡宮日記と略記)196点が所蔵されています。このたび、新たに貴重資料に指定され、本館の「貴重資料保管室」に保管されることになりました。

本資料は、本学が弘前八幡宮から10万円で購入し、昭和38年(1963)8月27日に、受入れたものです。受入れ後、教育学部に保管されていましたが、昭和55年(1980)ころに附属図書館へ移管し、以来、本館の貴重資料保管棚に収納され閲覧に供されてきました。

内容は、大きくは二つに分かれ、八幡宮の社務日記と風俗文選ですが、大部分を占めるのが、元禄6年(1693)から明治41年(1908)にいたる、215年間の社務日記です。弘前八幡宮の宮司を代々務めた社家頭しやけがしらの小野家が、17世紀末から20世紀初頭まで、途切れることなく記録してきた日記であり、全国的に

見ても類例は少ないと思われます。近世・近代における神道史、宗教史、津軽地方における宗教政策史、藩政史を研究する上で、大変貴重な資料であることは言うまでもありません。具体的には、藩政時代の弘前藩における神職の支配形態、寺社統制、明治維新期の神社側から見た神仏分離と国家神道の実態等を研究する上で不可欠の資料です。加えて軍都弘前のなかで果たした近代の八幡宮の役割など、示唆に富む記事内容から、今後、多くの研究者によって活用されるものと期待しています。

風俗文選は、江戸中期の俳人許六が芭蕉の遺志をついで編んだ最初の俳文選集で、宝永3年(1706)の刊。小野家の蔵書と推定されます。当時の社家たちや弘前の文人の教養等を知る上で、有益なのではないかと思われます。(はせがわ せいいち)



八幡宮日記の中で最も古い  
元禄6年(1693)の「万覚帳」



「万覚帳」元禄6年6月2日条。  
弘前藩4代藩主の母・久祥院立願の際に下付することになっていた、横内妙見堂など4社への初穂料についての記事